

僧も困りきって、おしよさま、今度は参りました。」と手をついたんだとお。さてごちそうを食べたあとお椀に湯をついでもううことになると、小僧すかさず坊さんに向つて「おしよさま、お椀に湯をなみなみいっぱいくださいませ。」「何するのじゃ。」そうして小僧はいっぱいがせていった。「おしよさまさてそのうえに湯をこぼれないようにしてくださいませ。」今度は坊さんが「参つたなあ、小僧に一本とられた。」とあやまつたんだとお。

庭を掃く小僧のはなし ①

むかしあるお寺にたいへん知恵のすぐれた小僧がいたんだとお。秋もふかくなって、寺の庭の泉のほとりや繁みの植木も紅葉となり、毎日落ち葉が風吹くと散つてきて、掃いても掃いてもつもるばかり。そこで坊さんは「小僧、今日も風が吹いてまた落ち葉が庭いっぱいになった。お寺はちり一つとどめておいてはならない。ごくろうだが掃いてくれよ」といつけたとお小僧は、いちようやかえでなどのあかやきいろの美しい落葉を掃くのが惜しくて、だまって見ていたが、何思つたのか庭木のところへ行つて、木をゆすつて落葉をいっぱいしきつめ、おしようのところへ行つていうに「おしよさま、掃いて参りました。」そういったんだとお。おしよが書院の読書からたつて縁にたつてみると、庭いっぱい落ち葉ばかり。それが夕日の沈む少し前とあつて、何ともいえぬ美しい情趣となつていたんだとお。それを見ておしよは感に堪えぬように見入つてこういったんだとお。「感心。感心。よくはいてくれた。お前はなかなかよくものを見るなあ、末恐ろしいものになるわい。」と。この小僧はあとで名高い坊さんになつたんだとお。